

保育者養成課程における「身体表現」科目の 学習内容の検討

—アクティブラーニングに視点を置いた分析—

佐藤 みどり

(2017年9月25日受理)

要 旨

保育者養成課程における身体表現科目の学習成果を探るため、半期15回の授業を計画・実践し、学習成果をアクティブラーニングの視点から分析した。学習者の自由記述から抽出された全記述を、文科省の提案するアクティブラーニングの視点である3つの柱に沿って分類を行った。その結果「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「主体的に学習に取り組む姿勢」の3つに分類することができ、「知識・技能」31%「思考力・判断力・表現力」29%「主体的に学習に取り組む姿勢」40%という割合を示した。本論では、最も割合が多かった「主体的に学習に取り組む姿勢」に着目し、大概念「主体的取組姿勢」をさらに小概念として「他者交流」「積極性」「応用（活用）」の3項目に分類した。その中の「他者交流」項目に関して詳しく分析したところ、本授業において「主体的で対話的な学び」は実現されていたものの「深い学び」にまでは至っていなかったことが示唆され、授業の改善点として浮き彫りになった。

キーワード 身体表現、アクティブラーニング、内省記録、質的研究

はじめに

平成元年（1989年）に幼稚園教育要領が改訂され、身体表現に関する保育内容は領域「音楽リズム」から領域「表現」へと変わり、“動きの表現”が重視されるようになった。その後1998（平成10）年と2008（平成20）年にも改訂されたが、内容に大きな変更はみられない。2008年告示の「表現」領域では、「感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする。」と明記されている。特に“動きの表現”に関する内容は、幼稚園教育要領¹⁾における領域「表現」の（1）（4）（8）に示されており、以下の3項目となっている。（1）生活の中で様々な音、色、形、手触り、動きなどに気付いたり、感じたりなどして楽しむ。（4）感じたこと、考えたことなどを音や動きなどで表現したり、自由にかいたり、つくったりなどする。（8）自分のイメージを動きや言葉などで表現したり、演じて遊んだりするなどの楽しさを味わう。（表1・下線筆者）

1

表1. 幼稚園教育要領における領域「表現」

表 現
感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする。
ねらい
(1) いろいろなものの美しさなどに対する豊かな感性をもつ。 (2) 感じたことや考えたことを自分なりに表現して楽しむ。 (3) 生活の中でイメージを豊かにし、様々な表現を楽しむ。
内 容
(1) 生活の中で様々な音、色、形、手触り、動きなどに気付いたり、感じたりなどして楽しむ。 (2) 生活の中で美しいものや心を動かす出来事に触れ、イメージを豊かにする。 (3) 様々な出来事の中で、感動したことを伝え合う楽しさを味わう。 (4) 感じたこと、考えたことなどを音や動きなどで表現したり、自由にかいたり、つくったりなどする。 (5) いろいろな素材に親しみ、工夫して遊ぶ。 (6) 音楽に親しみ、歌を歌ったり、簡単なリズム楽器を使ったりなどする楽しさを味わう。 (7) かいたり、つくったりすることを楽しみ、遊びに使ったり、飾ったりなどする。 (8) <u>自分のイメージを動きや言葉などで表現したり、演じて遊んだりするなどの楽しさを味わう。</u>

(作表・下線：佐藤)

領域「表現」内容8項目のうち、筆者が抜粋した3項目(表1)から“動き”に言及した文言をみると、a.「生活の中で様々な動きに気付いたり、感じたりなどして楽しむ」b.「感じたこと、考えたことなどを(音や)動きなどで表現したり、自由に(かいたり)つくったりなどする。」c.「自分のイメージを動きなどで表現したり、演じて遊んだりするなどの楽しさを味わう。」(表1下線部分)という文言を抽出することができ、この3つが「身体表現」の学習内容と密接に関わる項目といえる。(括弧は筆者)

保育における身体表現とは何か?鈴木²⁾は、古くて新しい問いで答えの着地点が一つではないようだとしながらも「身体表現とは、身体でなりきるといふファンタジーの世界(環境)をつくり、そこに保育の意図を埋め込むことをめざす活動の総称である」と述べている。また柴³⁾も「身体表現とは、自分の表したいイメージにふさわしい動きを工夫して身体で表現する活動であるが、心の働きや運動能力など、からだがつもっているさまざまな力がまだ未分化な状態にあり、とりわけ“まるごとのからだ”を投じての活動が望まれる幼児期に是非経験させたい活動である。」と述べ、子どもの心身の発達を促す身体表現の重要性を説いている。

一方保育者養成に目を向けると、西ら⁴⁾は「保育者に求められる専門的資質が、知的(知識的)・技術的専門性から感性的専門性へ、『知っていること』と『いまここで、すること』の落差をどう埋めるかの問題へ変わってきた」と述べ、「保育における子ども理解は、“ことばではなく身体全体を通して”なされることから、言葉の未発達な乳幼児期の子どもとかかわる保育者には、豊かな身体的感性と創造的で柔軟な行動が求められる。」と保育者のあり方に言及している。前述の鈴木⁵⁾もまた、「身体的な感性が保育者の資源となることや保育者が自身の身体を自覚的に捉えることで、身体表現活動の技術を豊かに機能させる」と、保育者としての感性を育むことの重要性を説いている。菅沼⁶⁾の子どもの表現を考える前に、まず学習者自身が豊かな表現者であることが大事なのではないか、という主張とも重なり示唆に富んでいる。このように、身体表現活動を『いまここで、すること』⁴⁾として実践できる保育者を育成することが、将来にわたって重要な課題といえる。

保育者養成課程における身体表現科目に関する授業研究はいくつかみられる^{7~13)}が、数が多いとはいえない。新山¹⁴⁾は、表現領域の授業研究は、学会の口頭発表では増えているが、原著論文や実践報告の数は少ないと述べ、保育の質や内容に直接的にかかわる表現領域の授業研究は、もっと推進される必要があることを強調している。また、同じく新山ら¹⁵⁾も、保育者養成の授業に関して研究が十分になされているとは言い難い理由として、研究者と実践者が同一であり、データの収集が難しいことが挙げられるとしながらも、研究の推進が望まれる分野と指摘している。筆者らも、これまで授業者自身が授業内容を検討する実践研究を行ってきた^{16, 17)}が、学習内容の検討にとどまり学習成果の詳細な分析までには至っていない。

ところで、文科省から2012年に出された中央教育審議会において、「能動的学修(アクティブラーニング)への転換」が提起^{注1)}され、大学教育のアクティブラーニング化が進められている。アクティブラーニング型の授業とは、「学生のスキルの育成、分析・総合・評価に関わる活動(議論する)、自分自身の態度や価値観を探求、プロセスの外化」¹⁸⁾を実現する授業であり、文科省はこの“アクティブラーニング”型を推奨しており、実技科目(演習科目)も例外ではない。アクティブラーニング型授業に関して身体表現の観点から考えてみると、演習科目である身体表現は、自らの体を動かし身体意識を磨くことや豊かな感性を養うための活動を学習内容に取り入れ、グループ活動にも重点を置いて実施している事例が多くみられることから、もともとアクティブラーニング型の要素が強い授業といえよう。しかし、身体表現授業が本当にアクティブラーニングとして機能しているのか、どのような点に関連深く成果をあげているのかをみた研究は未だ皆無に等しい。

そこで本研究は、保育者養成課程における身体表現科目の学習成果を探るため、演習科目「身体表現」を計画・実践し、学生の内省記録をもとにアクティブラーニングの視点から分析し、授業改善の方法を検討するものである。

方 法

1. 研究対象と学習計画

2016年後期にO短期大学保育学科1年Bクラス(女子32名)を対象とした全15回の授業「身体表現I」を実施した。O短大保育学科は、1学年約140名で3クラス編成となっている。今回Bクラスのみを対象とした理由は、本研究が量的研究ではなく質的研究であり、対象者数より記述内容の分析に重点を置いたことから、1人当たりの平均センテンス数(8.8)や総センテンス数(284)が適切と考えたからである。

表2. '16身体表現I (O短大) 学習計画と実践

回/テーマ	学 習 内 容
① オリエンテーション	授業の進め方(受講上の諸注意・事前調査等)
② 自分の体を知ろうI	・効果的なストレッチング方法 体ほぐし運動(2人組) <身体意識> ・限られた空間でぶつからずに移動 ステップ(マーチ) <空間意識>
③ 自分の体を知ろうII	・W-up:毎時のストレッチと体ほぐし(2人組、4人組) ・手遊びからステップも加えて(2人組ローテーション)
④ リズムにのってI	・W-up:毎時のストレッチと体ほぐし(2人組、4人組) ・基本のステップ練習(軽快なリズムでスキップ♪おつかいありさん)
⑤ リズムにのってII	・W-up:毎時のストレッチと体ほぐし(2人組、4人組) ・基本のステップ練習(軽快なリズムでツーステップ♪さんぽ)
⑥ リズムにのってIII	・W-up:毎時のストレッチと体ほぐし(2人組~6人組) ・基本ステップを活用してリズムカルなダンスを創る。 グループでアレンジ作品(♪森のくまさん)→見せ合い(発表)
⑦ リズムから表現へ	・W-up:毎時のストレッチと体ほぐし(2人組~6人組) ・習得した基本ステップを全て活用してストーリー性のあるダンスに。 グループのオリジナル作品→見せ合い(1グループ毎発表)
⑧ 用具フープを使って	・W-up:毎時のストレッチと体ほぐし(2人組~6人組) ・フープ(輪)を用いたさまざまな“遊び”を考えグループ毎に発表。
⑨ マットを使って	・W-up:毎時のストレッチと体ほぐし(2人組~6人組) ・カラフルなマットからさまざまな“遊び”を考えグループ毎に発表。
⑩ 縄を使って	・W-up:毎時のストレッチと体ほぐし(2人組~6人組) ・大縄や小縄を使ってさまざまな“遊び”を考えグループ毎に発表。
⑪ 布を使って	・W-up:毎時のストレッチと体ほぐし(2人組~6人組) ・カラフルな大小の布から発想を拡げ、さまざまな“遊び”や“表現” を考えグループ毎に発表。
⑫ 冬のイメージで表現	・W-up:毎時のストレッチと体ほぐし(2人組~6人組) ・冬のデッサン⇒連想語⇒グループ活動(テーマ冬小作品)⇒発表
⑬ 実技小テストI	・基本のステップを組み合わせたオリジナル小作品(グループ練習)
⑭ 実技小テストII	・基本のステップを組み合わせたオリジナル小作品(ソロテスト)
⑮ 総まとめ	・ストレッチ・体ほぐし等のW-up「体の気づき」総復習 ・評価および事後調査

授業(半期全15回)のねらいと学習内容を構成する観点は、「身体意識」「軽快なリズム」「表現遊び」である。この3つの観点は、前述の西ら⁴⁾鈴木⁵⁾菅沼⁶⁾が保育者のあり方として言及している“豊かな身体的感性と創造的で柔軟な行動”“保育者が自身の身体を自覚的に捉えることで、身体表現活動の技術を豊かに機能させる”“子どもの表現を考える前に、まず学習者自身が豊かな表現者であることが大事”などの説に沿って掲げた。これらを受講生に“自分自身の体を知ろう”“リズムにのって踊ろう”“子どもも楽しめる表現遊びを作ろう”という具体的で平易な文言に置き換え3つの大きなねらいとして提示した。学習内容は表2に示すとおりである。授業の初盤(1~3回目)は、効果的なストレッチの方法や軽快なリズムにのって動くことなど、自分の体を知り相手(仲間)との物理的距離感を知り調整することや空間認識を持つこと、基本的な体の使い方等に重点を置いて展開した。中盤(4~11回目)は、軽快なリズムに乗って基本的なステップの習得から応用(アレンジ)した小作品の見せ合い(発表)へとつなげ、続いて縄や布などの物から発想を得て“独創的な遊び”に仕上げグループ毎に発表した。終盤はあえて物を用いず季節(冬)のイメージから発想を拡げ、テーマを決めてグループ作品に発展させ、最後に毎時間積み上げてきた基本ステップの総まとめとして実技小テストを実施した。

表3. 授業(1回90分)の流れと実践例<第6次>

時間	内容	<実践例第6次>	※指導の要点
導入 (15~20分)	<ul style="list-style-type: none"> 毎時のウォームアップストレッチと体ほぐし 基本ステップの練習 	1. 振り返り・本時の学習内容(2人・5~6人組グループ分け) ① 毎時のストレッチと体ほぐし ※ ストレッチの留意点を確認。 ② 基本ステップの復習(マーチ・スキップ・ツーステップ) ③ 基本ステップのアレンジ(後ろ向き・仲間と一緒に) ※ スムーズな空間移動を意識。	
展開 (45~50分)	<ul style="list-style-type: none"> 本時の課題提示 発想・イメージの出し合い 	2. リズミカルなダンス創り ① “森のくまさん”でリズミカルなダンスを創ってみよう ② 全員で歌いながら、リズムや物語を共有する。 →歌いながら動いてみる	
	<ul style="list-style-type: none"> グループ活動(基本⇒アレンジ、創作等) 	3. 各グループの練習場所を提示 ※ グループ活動時の留意点 ※ 動き出しの積極的な姿勢を促す グループ巡回と助言。	
まとめ (15~20分)	<ul style="list-style-type: none"> 見せ合い(小作品発表)グループディスカッション 指導者の一言コメント 毎時の学習記録 	4. 見せ合いと相互評価 ① 半分ずつ見せ合い、互いに良い点をほめる 1. 3. 4班発表⇔2. 4. 6班鑑賞 ② 各グループ毎のディスカッション ③ 発表者各グループ1名 ※ 各班に一言コメント 5. 本時のまとめ ・学習用紙に記述(各自)	

1回90分授業の流れと実践例(第6次)は表3に示すとおりである。毎回行うW-up(ストレッチ、実技小テストのための基本ステップ練習)に続き、課題(各時間のテーマ)の提示、グループワークおよびまとめという構成である。最初にW-up(ウォームアップ)として指導者と共に各自のストレッチを行う。その後、2人組になり互いの体の重さを感じながら寄りかかったり引っ張り合ったりをゆっくりと繰り返し、背中を押し合い支え合いながら立ち上がるまでを一連の流れとした。次は基本のステップ練習であり、これも毎回のルーティンとしてスキップやギャロップ、ツーステップ等の基本的なステップを軽快なリズムに合わせて行う。指導者が打楽器でテンポを決めたり、受講者同士が手拍子でリズムを刻んだり、時には子どもの好きな歌(おつかいアリさん、森のくまさん等)を歌いながら動くこともあった。次の段階は課題の提示である。例えば、基本のステップの練習からアレンジしてグループの小作品にまとめることや、用具(輪・縄・マット等)を使った遊びをグループでアイデアを出しあって作ったり、季節のイメージを広げて小作品を創るものである。まとめの段階としては、見せ合いとディスカッションである。学習の初期段階では、まだ恥ずかしさが抜けずためらいが残る時期なので、1グループずつの発表をさけ徐々に少ないグループでの発表とし、最終的には1グループずつ発表ができるようになった。

表3右列に示した第6次は、15回授業の中盤で毎時の流れが定着してきた時期の実践例である。スキップやツーステップなど基本ステップを軽快な音楽に合わせて踏むことが受講生の大部分に浸透してきた時期であり、子どもの歌である“森のくまさん”に合わせてグループ毎にアレンジした小作品に創りあげ、半分ずつ見せ合うという流れになっている。前述のように、この時期は1グループずつ全員の前で小作品を発表(パフォーマンス)することに未だ抵抗があるという危惧があったため、クラスを半分に分けて発表した後、ペアグループの良い所をみつけてほめるという方法をとった。そのため学習者は、自グループの発表になると、速やかに立ち上がって正面のペアグループを子どもに見立て動きを大きく明確に見せようとする姿が散見された。授業後のまとめでは、「ペアグループからフォーメーションが良かったと言われて嬉しかった」「見てくれた仲間には、最後のポーズがかわいかったとほめてもらい、先生にはすぐに立ち上がって練習に取り組めていたとコメントをもらいました」「ストーリー性のある歌なので、くまさんの役柄を決めてすぐに進められた」などの記述がみられたことから、人前でためらわずに表現することと、仲間の良い点を見つけてほめるということが、ある程度達成できた授業であったと考えられる。

2. データ収集と分析方法

鈴木直樹ら¹⁹⁾は、「体育授業の質的研究法の開発」の中で、「(量的分析のみでは)数値情報として客観化されたもののみがデータとして取り上げられ、授業の状況や文脈は捨象される傾向があり、授業に流れている「かかわり合い」の様相を分析し、評価することなしには授業改善は行うことができない」と述べている。そこで本研究は、質的な研究方法によって分析され、質問紙による自由記述の回答によって得られた記述を、その内容ごとに身体表現の観点から検者が解釈しカテゴリー化を行った。事後調査(最終15回目授業)の質問項目

は基本的に感じたことを何でも記述できるように、「この授業全体を通して学んだことや感じた(印象に残ったこと等)ことを書いて下さい」という幅広いものを設定し、回答者からの複数の回答を誘導することとした。データ採取は全受講生(32名)を対象に最終授業日(15回目)に実施した。データの分析方法は、質的調査のデータ整理の方法に従い、KJ法によるマッピングを行った。作業については短大において身体表現を担当する本研究者が専門の立場から単独で行い、作業結果を保育内容「表現」領域を担当する短大教員2名と心理学の教員1名が検討し、意見をもとに修正を行った。

本研究の調査対象者には、最終授業において研究目的および趣旨説明を行い、同意を得た。また、データ使用(結果の公表)についても許可を得た。

結果と考察

1. 内省記録(自由記述)の分類

身体表現Ⅰの最終授業(15回目)で実施した事後調査において、学習者の自由記述による記述量は全284センテンスであり、一人あたりの平均は8.8センテンスであった。抽出したセンテンスの類型化を試みるため、身体表現授業における学習者の自由記述を分類・分析した先行研究を参考にした。岡本²⁰⁾は学生の身体表現意識を「感性」「コミュニケーション」「身体表現」「その他」に分類している。新山²¹⁾は、「保育者養成における身体表現授業の学びと保育実践への有用性分析」の中で「心と身体の解放」「日常・非日常の切り替え」「自由・即興・交流」「体験的学習」という4つの類型化をしている。また、体ほぐし運動に関する研究で松本²²⁾は「情意的な肯定」「運動に関する価値」「身体性と実存、動きの認知」「共同での達成と問題解決に対する知恵・工夫や作戦・役割分担」という4項目に分類している。いずれも身体表現や体ほぐし運動の特性をとらえた観点から学習者の自由記述を分類・分析し優れたものとなっている。本研究の事後調査によって得られた全記述284センテンスを、岡本、新山、松本それぞれの方法で分類を試みたが、いずれも本授業の学習特性をとらえた類型化には至らなかった。そこで分類の観点を身体表現からアクティブラーニングに転じ、文科省の提案するアクティブラーニングの視点である3つの柱^{注1)}に沿って分類を行った。その結果、「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「主体的に学習に取り組む姿勢」という3分類が可能になり、「知識・技能」31%「思考力・判断力・表現力」29%「主体的に学習に取り組む姿勢」40%という割合を示した。(図1)これらは、どの項目も3~4割というバランスとなった。記述内容の分類バランスがよいことが必ずしも良い授業に直結するとは限らないが、少なくとも学習者の学びが1つの観点到るに偏ることなく進められたものと推察される。

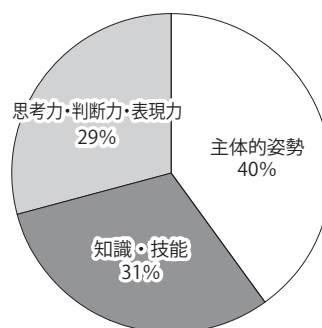


図1. 3つの柱(アクティブラーニング)による分類

2. アクティブラーニングの3つの柱に沿った分類

表4に示すように、前述のアクティブラーニングの3つの柱（1. 知識・技能の習得 2. 思考力・判断力・表現力 3. 主体的に学習に取り組む姿勢）を“大概念”とし、さらに細分化した項目を“小概念”として分類した。大概念と小概念の分類方法を、大概念1. 「知識・技能の習得」を例に取って説明したい。まず「知識の習得」と「技能の習得」に分けて考えた。「知識の習得」は文字通り「理解」であり、「～がわかった」等必ずしも身体運動として上達しなくても知識として理解が深まったことを指している。技能の習得は「上達」と「自他の体」に2分した。自己完結型の「始めはスキップができなかったけれどできるようになった」等を「上達」とし、「背中合わせで（互いに体重をかけあって）立てるようになった」「2人組で（両手をつなぎ）キープできた」「6人背中合わせで立ち上がった」等の自他の体の相互作用で技能習得が可能となったものを「自他の体」と名付け分類した。

表4. 分類 (佐藤による)

284センテンス

大概念	小概念	数	記述例
1. 知識・技能の習得 31% (89)	上達	53	<ul style="list-style-type: none"> ・ストレッチでは、前より体が柔らかくなった ・いろいろなステップを覚えてできるようになった ・リズム感も少しずつよくなっていったと思う
	自他の体	24	<ul style="list-style-type: none"> ・2人組で体をキープするのは全くできなかったが、最後にできるようになった ・4人でも6人でも背中合わせで立てるようになった
	理解	12	<ul style="list-style-type: none"> ・自分はどこがかたいのか、どこが柔らかいのかを知ることができた ・反動をつけずにストレッチをやると効果的と感じた
2. 思考力・判断力・表現力 29% (81)	思考・判断	28	<ul style="list-style-type: none"> ・グループごとの発表で自分のアイディアがたくさん増えた ・子どもには単純な動きがわかりやすくいいと思う
	表現・感性	53	<ul style="list-style-type: none"> ・発表することに恥ずかしさがなくなりました ・存分に体を使う楽しさとできた時の達成感を味わった ・“冬”がテーマでイルミネーションを体で表現したことが印象的でした
3. 主体的に学習に取り組む姿勢 40% (114)	積極性	13	<ul style="list-style-type: none"> ・曲に合わせてふりつけを考える活動で、進んで意見を出すことができた
	他者交流	81	<ul style="list-style-type: none"> ・この授業をするたびに新しい友だちも増えました ・難しいことも斑のみんなで考えればけっこうアイディアがでてくるということを学んだ ・グループで「ここ工夫したよね」とすぐに話し合うことができた ・意見を出し合い遊びやダンスを考えるのは初めてで、コミュニケーション力のアップに繋がった
	応用(活用)	20	<ul style="list-style-type: none"> ・想像力が前より豊かになった気がするので、実習などでも活かしていけたらと思います ・他のグループの良いところや改善点を、グループディスカッションで深めることで子どもの安全を考えた遊びを見つめることができた ・この授業を、これからの実習に活かせるようがんばりたい

同様に、大概念2.「思考力・判断力・表現力」と大概念3.「主体的の学習に取り組む姿勢」に関しても、具体的な記述を小概念に分類し、学習内容に即して名付けた。

1) 分類項目「知識・技能」(89/284センテンス・31%)

前述のように、大概念1.「知識・技能」に分類した項目を、さらに“上達”“自他の体”“理解”に分けて分析した。小概念“上達”の項では「ストレッチでは、前より体が柔らかくなった」や「いろいろなステップを覚えてできるようになった」「リズム感も少しずつよくなっていったと思う」などから学習者自身の技能向上に言及した記述がみられた。3つの小概念のうち、最も記述量が多かったのはこの“上達”(53/89センテンス)の項であった。また、小概念“自他の体”の項では「2人組で体をキープするのはまったくできなかったが、最後にはできるようになった」「4人でも6人でも背中合わせで立てるようになった」など仲間と互いの体の重さを感じたり支え合いながら身体意識を持てたことが明らかになった。さらに小概念“理解”の項では「自分は(の体は)どこがかたいのか、どこが柔らかいのかを知ることができた」「反動をつけずにストレッチをやると効果的と感じた」など自らの体に関する感覚・気づきを深めていた。

これらのことから、本授業において「体が少し柔らかくなった」「効果的なストレッチ法を知った」など「知識・技能」の獲得に関わる記述が31%となり、身体に関する感性を研ぎ澄ませていた様子が伺えた。その反面、「ステップの練習では、スキップはスムーズにできたけど少し難しくなると覚えるのが大変だった」と技能の習得にやや困難を感じている記述もみられた。

2) 分類項目「思考力・判断力・表現力」(81/284センテンス・29%)

大概念2.「思考力・判断力・表現力」に分類した項目を、さらに小概念“思考・判断”“表現・感性”に分けて分析した。“思考・判断”の項では「グループごとの発表でアイデアがたくさん増えた」や「子どもには単純な動きがわかりやすくいいと思う」など学習者自身が考えたり見極めたりしたことが記述から明らかになった。小概念“表現・感性”に分類された項では「発表することに恥ずかしさがなくなりました」や「存分に体を使う楽しさでできた時の達成感を味わった」「冬がテーマでイルミネーションを体で表現したことが印象的」などの記述から自己表現できたことやイメージに合った表現ができたことに言及した記述がみられた。その反面、「物を使った遊びでは、子どもでもできるように工夫するのが難しかった」や「私の発表は、言葉が足らず相手に伝わりにくかったかなと思ったので、もう少しわかりやすく発表できればよかった」など、イメージを膨らませたり、それを身体や言葉で表現することに対する苦手意識を感じた記述もみられた。

3) 分類項目「主体的に学習に取り組む姿勢」(114/284センテンス・40%)

大概念3.「主体的に取り組む姿勢」に分類した項目を、さらに小概念“積極性”“他者交流”“応用(活用)”に分けて分析した。“積極性”に分類した項目は、「曲に合わせて振り付けを

考える活動で、進んで意見を出すことができた」など記述がみられた。小概念“他者交流”では「この授業をするたびに新しいと友だちも増えました」「難しいことも班のみんなで考えればけっこうアイデアが出てくるということを学んだ」などグループ活動の中から得られたことに言及した記述が多くみられ、3つの小概念のうち最も記述が多かった。(82/114センテンス)また、小概念“応用(活用)”では「想像力が前より豊かになった気がするので、実習などでも活かしていけたらと思います」や「他のグループの良いところや改善点を、グループディスカッションで深めることで子どもの安全を考えた遊びを見つけることができた」など、今後に繋がる発見や学びを見出している記述がみられた。その反面「みんなとグループで発表する時は、考え過ぎて練習を始めるのが遅くなりました」「グループでの話し合いの時に、なかなか意見が出なかったり、逆に過ぎてうまくまとまらない時もあった」などグループワークが必ずしもスムーズに進まなかったという記述もいくつかみられた。

3. 特に「主体的取組み姿勢」に着目して

アクティブラーニング型授業を推奨する視点のひとつである「主体的で対話的な深い学び」を考えるために、分類項目の大概念3.「主体的に学習に取り組む姿勢」項目に着目して考察を進めたい。今回、全記述を3つの大概念(1.「知識・技能」2.「思考力・判断力・表現力」3.「主体的に学習に取り組む姿勢」)に分類したが、その中で最も記述量の割合が多かった項目が3.「主体的に学習に取り組む姿勢」(40%)であった。表4にみられるように、大概念3.「主体的取組姿勢」を、さらに小概念として「他者交流」(81センテンス)「積極性」(13センテンス)「応用(活用)」(20センテンス)の3項目に分類した。この3項目の中でもさらに最も記述数が多かった「他者交流」(81センテンス)項目に関して詳しくみていくと、その記述内容に違いがみえてくる。それは学び方の質や深さに関わる要素と考えられるものである。「この授業で友だちが増えた」など、単に仲間と楽しくコミュニケーションがとれたことに言及している記述を「仲間(コミュニケーション)」と名付けて図2の最下段に配した。次に「意見を出し合い遊びやダンスを考えるのは初めてで、コミュニケーションのアップにつながった」のように仲間と共に学んでいる姿、仲間がいたからこそその学びと言える記述を「仲間との学び」と名付けて「仲間(コミュニケーション)」項目の上に配した。仲間と共に学ぶ、仲間から学ぶ、相互に学び合う項目であり、学び方がより対話的で深まっていく構図がみえてくる。この「仲間との学び」は、身体表現の内容により深く入り込んだ活動であるが、その下に配された“仲間(コミュニケーション)”(57)よりも記述量(センテンス数)が少なくなっている(20)。

10 図2はKJ法の手法により抽出した概念を示しており、各概念の近いものや並列しているものは関連深いことを意味し、下方概念から上に向かうにつれて深い学びの実現を示唆している。つまり、下段のグループ活動(対話的)を下支えにして、より積極的(主体的)に学ぶことで将来につながる深い学び(応用・活用)が成立していく構造を示している。この図示の左側には、他者との関係で身体感覚を養う大概念1.「知能・技能の習得」項目のうちの小概念「自他の体」項目もあえて加えた。これは、「互いの体重をかけて脱力の経験をする」

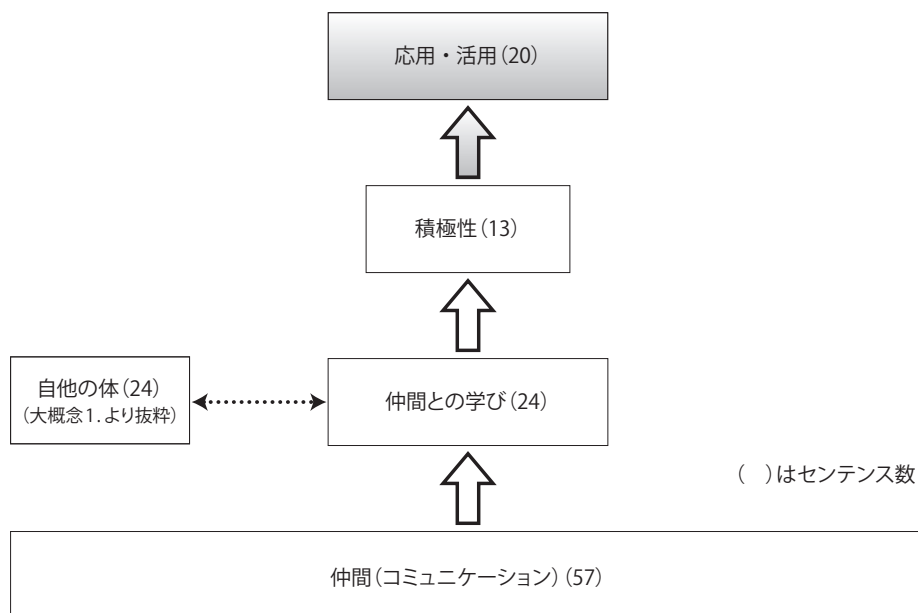


図2. 主体的な取り組み姿勢

など他者がいたからこそ学びを可能にした身体活動（技能習得）が「仲間との学び」に並列していると考えたからである。

このように、“深い学び”とは教師と学習者の相互作用に留まらず、学習者同士の学び合いも大きく影響しながら進捗していくことがわかった。学習は、指導者の一方的な働きかけだけではなく、受講生の教員への応答だけでもなく、教師と学習者の相互作用や、学習者同士の交流からより効果的になされているといえる。アクティブラーニングの視点である「対話的な学び」が効果的であることが立証されたといつてよい。しかし、単なる交流（仲良く・楽しく学習）に留まらない“より深い学び”に発展させるための工夫が、本授業の課題として浮かび上がってきた。文科省のアクティブラーニングの視点^{注1)}では、深い学びについて次のように言及している。「深い学びとは、「見方・考え方」を学ぶだけでなく、応えのない課題に直面した時、「頭の中の工具箱」から、自在に引っ張り出し、自分なりの解答を導き出せる力にまで高めるような、学びの在り方です。」保育現場への応用・活用が可能な深い学びにまで到達させるためには、想像から創造へ、相互のコミュニケーションから学び合い・高め合いへとつながる授業内容の精査と実践上の工夫が必要である。

今回の自由記述に関しては、「学んだこと・感じたこと・印象に残ったこと」に関して書くようにと学生に伝えていたため、活用（応用）に類する記述数（20）が少なかっただけで深い学び（活用（応用））に至っていないと単純に結論づけることはできない。しかし、1年次後期の実習前という時期でもあり、保育現場に対する意識がやや薄い受講者が多いという印象を筆者自身もったこと、指導者の「これは、こんな場面で使える」「こんな活用ができる」といった言葉かけやフォローが足りなかったことも反省点と感じている。したが

って、深い学びに導く具体的な工夫としては、今学習している内容がどのような場面で活かせるのか、またどんな応用ができるのかを数例提示し、学生自身が「頭の中の工具箱」に入れたり出したりできるような足がかりを作っておくことが必要であろう。第1回目のオリエンテーション時に子どもの身体表現に関する視聴覚教材を使用し、映像としてはあるが子どもが生き生きと身体で表現している保育現場を身近に感じさせたり、最終次（15回目）のまとめとして指導案（部分実習）を書くことに挑戦させることなども有効な方策と考えられる。新山ら²³⁾は、「学生が将来保育者となり、彼らが幼児に身体表現を援助している姿を想起しながら授業を行うべきであろう」と述べている。今後は、常に学生の後ろにいる子どもの存在を意識しながら学習教材を精査すると共に、学習成果を検証するための実践を重ねながら研究対象の規模も拡大していくことが課題である。

謝 辞

本研究における内省記録の分類および分析に関し、多大なる御助言を賜りました小田原短期大学の尾野明美先生に深く感謝申し上げます。

注)

1 「主体的・対話的で深い学び」の実現（「アクティブラーニングの視点」）

子供たちが、学習内容を人生や社会の在り方と結びつけて深く理解し、これからの時代に求められる資質・能力を身に付け、生涯にわたって能動的に学び続けたりすることができるようにするためには、子供たちが「どのように学ぶのか」という学びの質が重要になる。（一中略）「主体的・対話的で深い学び」が実現するように、日々の授業を改善していくための視点を共有し、授業改善に向けた取組を活性化しようとするのが、「アクティブ・ラーニング」の視点である。次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめ

（文部省中央審議会平成28年8月19日教育課程部会教育課企画程特別部会 資料2-1より抜粋）

引用文献

- 1) 文部科学省『幼稚園教育要領解説』フレーベル館, 2008, p.158-169.
- 2) 鈴木裕子「保育者の資質能力としての身体表現の理解」『保育学研究』51 (3), 2013, p.175-178.
- 3) 柴真理子『身体表現～からだ・感じて・生きる～幼児期における身体表現・ダンス』東京書籍, 1993, p.196-197.
- 4) 西洋子, 野口晴子「保育者としての身体的感性を育てる教育—授業での身体表現の体験による“共振”の形成とその段階の変化—」『保育学研究』43 (2), 2005, p.42-51.
- 5) 鈴木裕子 前掲論文2) p.177.
- 6) 菅沼邦子「保育者養成における保育内容「表現」の授業に関する一研究(3)—指導方法の見直しによる学習効果」『広島女学院大学論集』61, 2011, p.61-70.
- 7) 新山順子・西山修「保育養成における即興表現の授業実践と学びの特性」『保育学研究』52 (2), 2014, p.111-123.
- 8) 岡本雅子「学生の身体表現意識」『豊橋創造大学短期大学部研究紀要』24, 2007, p.69-73.

- 9) 新山順子「保育者養成における身体表現授業の学びと保育実践への有用性分析」『岡山県立大学保健福祉学部紀要』18 (1), 2011, p.19-28.
- 10) 秋田有希湖「身体表現におけるイメージの具現化についての一考察—短大生を対象に—」『豊橋創造大学短期大学研究紀要』25, 2008, p.33-41.
- 11) 古木竜太・佐藤みどり「保育者養成課程における身体表現活動に関する学習内容の検討 (1)」『国際学院埼玉短期大学研究紀要』29, 2008, p.101-108.
- 12) 古木竜太・佐藤みどり「保育者養成課程における身体表現活動に関する学習内容の検討 (2)」『国際学院埼玉短期大学研究紀要』30, 2009, p.27-37.
- 13) 古木竜太「身体表現活動「走る—止まる」の指導・援助法に関する報告—10年間の授業実践に着目して—」『国際学院埼玉短期大学研究紀要』38, 2017, p.51-60.
- 14) 新山順子 前掲論文9) p.20.
- 15) 新山順子・高橋敏之「保育者養成における身体表現教育に関する研究の動向と課題」『兵庫教育大学教育実践学論集』15, 2014, p.79-87.
- 16) 古木竜太・佐藤みどり 前掲論文11) p.101-108.
- 17) 古木竜太・佐藤みどり 前掲論文12) p.27-37.
- 18) 尾野明美 [ほか]「アクティブラーニング学習効果尺度の作成の試み—音楽・造形・身体表現系科目と演習科目に着目して—」『小田原短期大学研究紀要』7, 2017, p.56-63.
- 19) 鈴木直樹プロジェクト代表「体育授業の質的研究法の開発」『総合研究プロジェクト研究成果報告書Vol.16, 埼玉大学総合研究機構』2005, p.4-8.
- 20) 岡本雅子 前掲論文8) p.70.
- 21) 新山順子 前掲論文9) p.17.
- 22) 松本奈緒「中学校段階の体ほぐしの運動における学習者の概念形成」『体育科教育研究』31 (2), 2015, 1-16.
- 23) 新山順子・高橋敏之 前掲論文15) p.84.